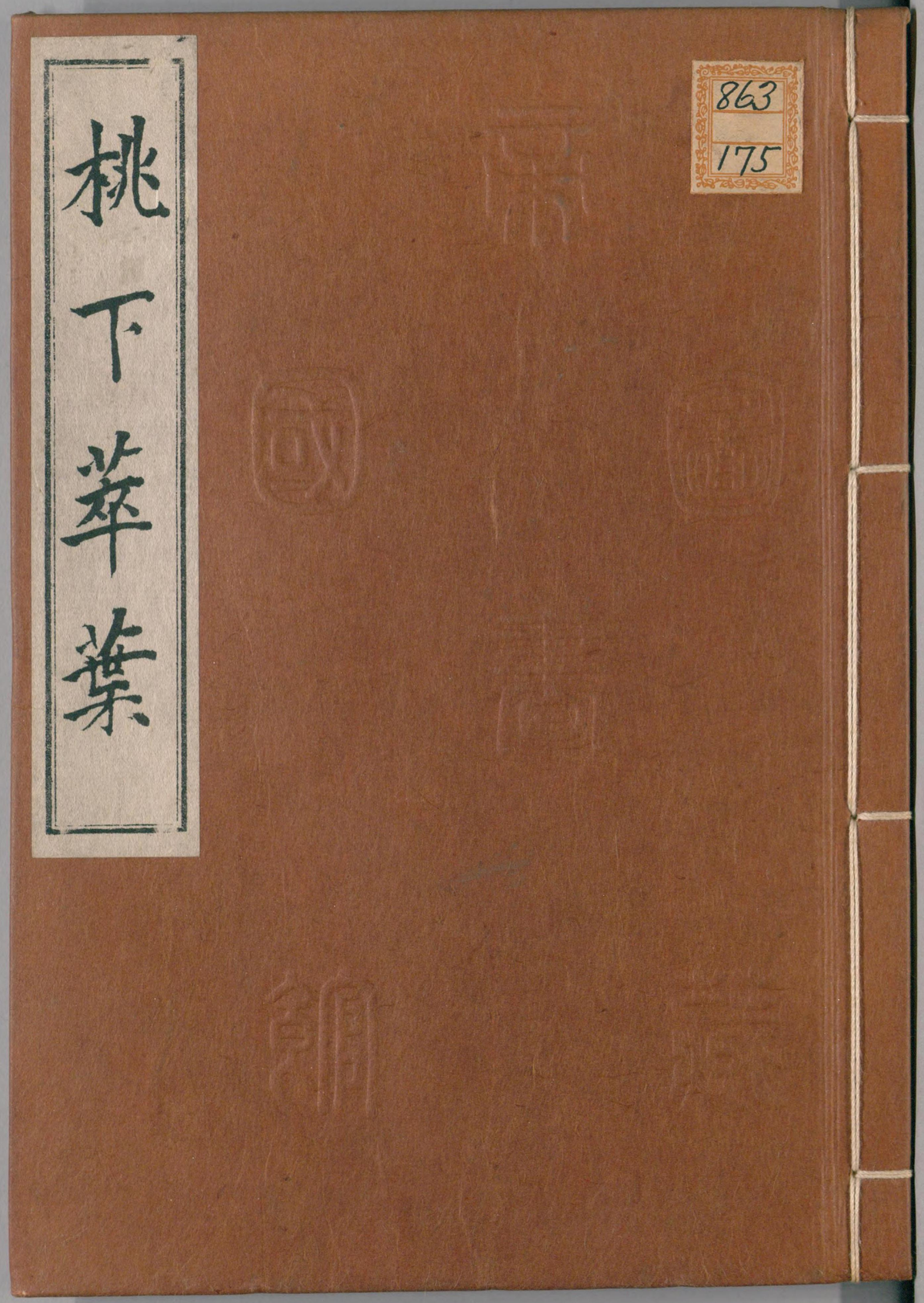


863
175

国立国会図書館　タイトル『桃下華葉』 請求記号 863-175

ガラス使用

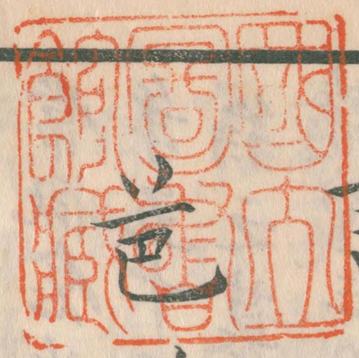
桃下華葉 全

芭蕉門徒數千

非諧作主不言讓

国立国会図書館　タイトル『桃下華葉』 請求記号 863-175

ガラス使用



非詩詣作主不讓
芭蕉門徒數千
厥猷孔昭

不二菴桃居加州人也其先勝見氏諱
忠茂幼遊誹歌師事桃好年及壯
發四方志嶮岨艱難備嘗漸入原初
常慨念蕉門之敝廿喪力拒邪帰正
年五十而卜居大坂而然重建芭蕉
翁之墓碑爾後値百年之忌辰修
齋會三日遐邇相應選句幾半三千
冬子日進古風鼎新由是
二條藤公特降 寵袞章俾稱中興宗

匠光輝蕉門若是乎豪享和三年三
月廿八日因病卒壽八十一茶毘之後
孝子桃處建石浮圖於纜坂梅奮院
丁小祥忌門人重建此碑紫野大順
禅師為贊維德永不衰乎也
文化甲子春三月花園筹二座宗大麟誌

老師墓碣之文以摸干左叙

奇淵坊桃序

国立国会図書館　タイトル『桃下華葉』　請求記号 863-175

ガラス使用

絶筆一篇

不二翁

梵雲山をおろす富士を雪
うち舟ゝ雑よの幻ゝゝゝ　桃處
大ゝゝ古ゝゝゝゝ　奇淵
法のもとのみよしの塔のみて　字舟
朝ゝ称子河をゆきもどる雪ふ　梅後
松繋信舟のうちもうつる雪　翔蘭
染そめて未終ゝゝゝゝ墓所　鶴堆

御成寺つゝみてハゝゝゝ　雪人
近ゝも又の年かなれも死化の秋　帰禽
水流ゝゝゝゝ前ひふつく　泉車
別栄ゝ飛よ流ゝ写川の里　柳化
ゝゝを雪ゝゝ吹のこと帰花　百堂
おゝゝしの枝もゝ　奏(二エ)の雪　楚東
おのゝハ口ゝゝゝ　桃野
初丁のゝゝゝ　蜂友
狩ゝみなかゝ　都友

国立国会図書館　タイトル『桃下華葉』　請求記号 863-175
ガラス使用

祢宜ともろ五位の冠
まろそ妙山て、
馬のこ乃聲のゆふ
古々おそへも鳥
白蘋の芳を加
巌のあくを黄生雪の
北山なあかりの
車かもよして文
まあたのうぬ意も
おつ北

来報
左菊
雨秉
馬産
井眉
賛之
五寅
方水
北水

頂山
一峰
可昌
丁江
何右
冰几
其草
夏江
湖卜

おてれ友も仏大楠
雪の白ゝ節
遠ゝ本刈園
我務を筆の
家子のそ
ぐ屋ゝはま
寒ともろ
椋(クラカヨ)巌乃西
社の雛と

国立国会図書館　タイトル『桃下華葉』　請求記号 863-175
ガラス使用

朝日さす軒ものてもまき簾　柏後

よいてのみて牡丹ふるる　有鳳

朝ぼらけ暁月もうち雲て　雨柳

雪ぞうつゆる沼風のうら也　寒羽

土用やう書さしの後て　士礼

木の葉拾ふて鯨煮ぬ　斗松

うちわれもの連歌の座て　升六

いくらも参よのもる夜の灯　春芸

右百韻一順

源氏の教上手なる

若水はきけやなかるる赤朝冬　男　桃處

注しても炉やきく庵とものこと　丶

不二翁の訃音を墨衣も湿す

あもきもちもて丁の便や春如る礼　加賀男　柳左

伯父不二翁をむつまの地もいてる雨よ

やまもり小山川百日を湯めを八病中

の書伝もちうひよやしら赤の八日安生

国立国会図書館　タイトル『桃下華葉』　請求記号 863-175

ガラス使用

業成の伝も聞まして紅生浄土の高塚を
遂るのみ　ともよむ詩ともなく
うち先として伝おくよもあるよ為を挙
初冥未の本懐ともも記念のこるのこと
地香のとくけよ花ぬきの墓　越前　三志
花ぬきやし月のいつまでの影の池　芦笠
ゆく人もとめぬ春の寒波を　如泥
おまふさ丁稚なつめむさらく　捨東

翁ぬ案畏くまのもを天
手も花ぬや烟の下の花もこそ
よーあーの芳ふんの庭ふむ　外六
とうかくこそ祢なやもしも祢をこひむひき　撲後
やみのそらそらをやまこひむしろ
おみこあやゆーしーもかこ祢菊
雑なよ名ましとも花を志る分　井眉
花ときよみ羽をあるる花の杜おもを　一峰
秋ぬそみも皇なり峰　孔出の田も郭　翔蘭

国立国会図書館　タイトル『桃下華葉』　請求記号 863-175
ガラス使用

沐浴なおのを剃刀をとりて　鶴堆
四手こぬし洗うもむよこまりを　何有
いうのもむ花つむ人も春もをぬ　雪人
いた鞍の雪こも解ひいてまもて行
時の翁き涙痕燭を剪殉麻を訊もるう
ととととと拠るのぬしハ督るもむ今すまを　学舟
何のまれ孔子まれ歌のそきましと愚まねす　蜂友
吟よそよそめてくる紅桜哉
未尊の花そてそよあのちかくし

諸ともよ新あるねつ暮の春　桓後
神を葉や書もこそ桔花花　有鳳
行春をはうちふくおくる涙を　柳化
も一切名も春も尊そくまる　都友
さもよれそ神よ志らるこそ　桃野
除除の松とりて
少除る鳥や除一も春の風　帰齋
人ちとよ活歌さへちる涙の年　百堂
後の世の牡丹こんこまへ等まる　泉車

国立国会図書館　タイトル『桃下華葉』 請求記号 863-175
ガラス使用

晴うてもくまでゆく春のそら　寒河
ゆかしさをこころにこめて名詩まま　春紫
遥る空へ笛の音の春よもつれる　神士孔
ちらちらな松ふのやわらぎ雲　五寅
春の夢ちぐ風も吹かぬ　左黨
蝶香のまつ毛にうまて泊日を　馬屋
雪とその名の花をあるうらを　河昌

なてもかぬ匂いそ　斗松
ちゝめても春を一日ともすること　湖卜
風よしく安ゆく花の行くえ　女鶴弐
花遥に社もちを花める西日かな　巳洞

不二庵去人をしく法祖翁の彩骨をつゝみて
詩をも自生ちるゝより訪く人しまゝあるを
るうたうすゝ此屋の日脈るとく降雪
をとゝ雪ひとをゝ庵室を吊ひ只哭

国立国会図書館　タイトル『桃下華葉』　請求記号 863-175
ガラス使用

乃秋をもちてもちなう楽浦の風雅を値遇をもて歌道の一家をなし
まへ宗かしまし
遥ともを
行春を結ふ新よしけるまで　雨龍
かきつばたある手ぬぐひおしてなる様　雨柳
松竹の蔭もとも寿の多ゐか　出真
月雪のごとうめてや花の形　女正子

春廿日の其かけ永き光りかな　升下

春雨ぬいとをそ等なうつほ　大江孔
春やいつ人日の影てかきつら　其日庵
洞院の馬頭よ宗匠の服を免許ありける
もむろにて
蒲ちるあとまでおるゆふ　及古庵
鳴ぬ日現も墨もよみこる　一歩斧
古きてふ事よ花のもとに　芦久家

国立国会図書館　タイトル『桃下華葉』　請求記号 863-175
ガラス使用

夕虹のきえそうで消てうき秋哉　三方坊

暮は春　秋のくれもおもひ寐し　文鳥舎

一つ蚊人こうまもをしむてを　若檀舎

蚤のもりて何をうまちの名ぞうな　八田氏　亀友

春ともなく物をうたふ八十七ちうな

きぬぎぬ蚤も蚤のもちの数掛　女　弁海

寿風のさそうで飛よへゆき雨乎　宅来

筆の跡ようて

雪消てゆくえ雲の金沙中扶の石二

寿ともふ中よはうをむや別霜　芦月

ふた名の雪ちとえ雪のまち　良鳳

寿柳の幹うれりとくまて寿　吾薗

おうめもうるへ古屋よ蚤よ根よ　徐耒

国立国会図書館　タイトル『桃下華葉』　請求記号 863-175

ガラス使用

仲平一昇ちよくしよくの自てふし　大智寺
ぞなもとてゝとのはふ詞てさくらを　紅園
雪のつらまた初やし此里乳　、儿眺
三地まも——ことも又そるよる　、大申春帰
行春やしこそ船町ま揖もこえ　、ミワ和山
ちゝめとも家中雪の風の花　、五條亀遊
きたゝ〳〵手しの末ちまハ神て不二庵もと
訪ひまのるま翁俤舎の句牢をこゝろ

ちるよやしの下はつ日そ
こまやの計ちるあしろく

きたのの不二のつてもあるや

りみてゝ修をと——てもゝる
雪あとことゝとゝ乃春ま　子来
我もてゝ福てゝ雛ゝつけ時　青湖
弥生ひろ移ゝ張て　外海
あとも追ゝまゝ於れて　来秋
最明の春々ハうまし　渕

あをこの声の若うぐひす
とうまでもあらしもや誘ふ秋の風　来
春ふかくこえ称とうたふ夕まぐれ　船
あら玉の春ある曲突をもとめて　海
擲の株をもとむる春すぎて　渕
代官の歌をぬすむ花の春　来
為門も貞享ふるき蒐
雉の卵うむ日のあたたかに　船
戯坊うつくしき夢　洞
　　来

もやう顔を人のうつして酌ん　軒
うめさくらもいつか墨ぞめ　海
雪のあの舟をうかべて花の春　来
若狭出る前の桜をもてなす　渕

梅ちるや汐干の笛の乱
吐かくし弥生の初恋人自慢まで
て汐干あふあるはらしまも同　月

国立国会図書館　タイトル『桃下華葉』　請求記号 863-175
ガラス使用

乃ち首八十一葉を録して世を去りぬ
おのれを水茎の河くつひの記念といちりぬ
よて服氣の仙道面々をつとりてのち追
福を倚み

西まちくらの千歳の春　風
擱筆の月も鐘のちきりて　風左九獨吟
さやあらし夢のねざめき
獨ゐの酒のかをゝ待つらん
萩も尾花も季のきぬ

奇淵
来鶴

水まち江のとろゝよりの舟をまる
すまふつまちくん　帝井迫ち

曽城
松居

雲をおく竜もちるはる、
てゝて手向するまと迷さら、
かまくらの春なちことは、
翁去ておて功ありの笑うを

松翠
詳樂
河内生駒侯
蓬宇

有秀

寿風や小しの烟の西るちひく、
碑の銘の聖をて葉のそうを、

花養

国立国会図書館　タイトル『桃下華葉』　請求記号 863-175
ガラス使用

岩の加け仏のくちの彼岸桜、氷水
うつくしき花みる夢の旅ごころ、江春
翁を悼てよめる
なゆくや一ちらのこる吟ずる鳥、東蟷
ちまき加みよ一日の春もうしろ、（宮田氏）八千里
吸露一壺うの字の亀、南六
ま傷ろーやまもり石二ツおもき、（古市）遊礼
ちる仲一言天の名へ入鳥て（摂津糸海）雪哉
月うれてちるさくら哉のおれ、東瓦

呼欲名残もしやなまめかの春籟、（洛）紫金
行春よりすこしおくれてすゝむ人よ神よ　丈左
強雪のめでたくもあるを思ふ

死まねき蘭山炎の夜の中、簑虫
東風の枝て雨る葉をみく事哉、紫暁
花をまつれつゝ人のひまをうかゝひ、五郎
口まね初ぬ春のあさ笠、寄笏
ちるらむ花とおもへとも猶、宋也
なをおとの出一さいはい春の暮、其成

春くまでこゝに松も淵ま寿北、　芦涯

紫のそこよ京つ淀　蓬室

遠樹面うめ声ちうこつちも　伏水　風竜

霞てゆく芝を宮達のさゝ〻ま　黄道　梅里

ちきうけもて玉つ柳の瞳光　岩つ菱可

なーや春芝よ翁てさへうなよ　翁澤　羅風

り春ゝやちかまつ松西の空　伊賀上野　一青

行まゝや伊まさうぬ旅　衣ヶ浦色　桃峰

指ま〻ゝ仏の金向井、　巴大

芝もゝや不弟さうとゐひよ、　枝友

あちまち松てゝ松茶の金窓、　枝角

芝はくよ浮玉の路の加〻ま　石皿淮東　二

はくゝの翁去仲を芝のを、　号雄

生神ゝ堂ゝも浮玉の亀ひ乳、　里橋

入月ゝ時まてゝ狗の滝うゑ、　一舟

吟降うしや芝の仲まあさり、　烏一

能まてゝ芝ゝ百乳　筑後　貞成

旅雁の帰るすうやま
いま仕舞うた春も消るう富士の雪　豊信
竹の秋望もちぬ風の一おれ　梨堺　蛸笛
ちるハつの帰雁も雲あらくまた　三の吉田　木朶
部公望すゑ春のひつまでハ　茶譴
あハ乳のくつ袖ちまく風の柳かな　素橋
ぬしてそよまちもを此岸　衆堂
ぬひてくつ入江もしう浪の花　古帆
芝一本おもてもろく蝶雅、當古　古流

柳もと　梅のちるハとうも江戸　春蟻
亂波津の事かうて廣金　乙十
芝ちりてあてまちまあ　小方　可友
名のみまく橋を芝ちもる　イヨ　梅里

卯七日

病家帝のまゝおうて御ゆうの雪ちる
小説そのを沙て讀休のしま今五同よ
ちりてやまひ帝ちうひつひ春遠遊

ありるうの平壷をおもむろにて
積のこす書のかへるを送れば　春洲
手向る香の名もかぐはしき　翁菊
うちなびく野辺の汚れを祓ひて　碧梧
幾上あるかなき水ぞうちすする　鶏雄
籠もる影めづらしく飛かふる　桃雲
簀めくへハ甘露の土　字舟
初午日新屋の牛うそぶくに二日まへ　斯葉鶏

魂うまし新築よかりそめます　雨葉
春西施のまゆしまるしおもふ。
梅の咲笠のかたちよかりそへバ　名何
うぐひす鳴や鏡沼の不二の朝烟　頂山
雨うきうきとちりゆく苔の翁松　松翁

和詩

潮まちるうねの岩　名のみやさしく
東つのうきまくら　そよぐもよい詩ぞ

千呂

国立国会図書館　タイトル『桃下華葉』　請求記号 863-175

ガラス使用

きうてう哉のきて惜しうする白牡丹　美蕊
美のさくらの春もあらきあしたい　魯井

うち名かのて又うきく日　教如　河内生駒楽　来雅
三十年来春の夢のあとたのうる不二老案
世をさまりて吉道の喜べてもくらしむ
学よともまむ老もる也　イカ上野　若翁
多国共の名ぬしうて　大和　風花丸
風雅のうもる多もくもるとも
子来

すきやもしひとつまつて活日北　肥前長崎　祥永
いつもよ八日のうのうくよれ　阿州明見浦　墨友
梨の梅本抓る賊　備後　西、徳島　西香
部云も一中鳥の朝　明　春枝
うしうおよものまし川ぬこの　伊勢川上　車龍
人の老も出うものすいちおうしる、　洛　御風
みしうおを活あ　摂津琵琶浦　蘭室
あるまちのへいうおせん　春人

国立国会図書館　タイトル『桃下華葉』　請求記号 863-175
ガラス使用

二七日

雪人

阿波徳盛
青橋

白項

杜宇声こゝろ二十七日　大和五条にて春

てしの奉爾奉ハ箱の像おもよ　発句を自ん

と矣して守そしも弁ものゐ也のひ

とりとハちまもも

二十七日

こゝ七のまこうつて春星ね

今まあて晴　ふなこのもの宿　柳化

字舟

夜ゆもそこの秋の彩　天　帰鷹

入也ないる舟の居風呂　桃雲

当ほこゆく花のこへ雪の月　春潤

二月つゝけて雪のかねくく　井眉

四七日

あもきちす　芸元四ひの来の雪　翁菊

神ぬそそのも咲ん交るうな　学舟

孫ちうまひ八親重も風迎て　春河

国立国会図書館　タイトル『桃下華葉』　請求記号 863-175

ガラス使用

秋のうづらの声ちかし　柏角
初雪や秋のこりなく吹つもる　梅後
ひとつ葛籠をよぎるふる　桃雪

寒梅や一輪ほどの春もなし　八千坊
朝業やあさなあさなの雪も海　夏江
ぬりてうす学の姿や百合の花　氷八
宮めぐりよりおそき花の香や　左手
花ものへを祈て百合の海ホ　玉義

十あまり七ツ年をうつりやネこゝも仲秋
して愛楽院を旅寓とします
月ちかし花の咲ぬ松ばかり
横ふあるさと乳山根の花一輪
ま悩つゝ多まして塚まで向ぬ初ひうらう
や平日人の為して四年の藤あるまでも祖翁の示
しあるやとそのいへを宿
あるこゝろにまかせてまたゝくよ

つきて九秤——そうそう手も加えて
出来上りを手の役をつとめやう深川で教へます
おいらんよく服装てとまりしいくり
笠をかぶりとぼまへさんは日暮れた
道をきて日暮れた山桃の
そこを其まゝお預けいきりめしませんを
よりおもひ出をあいまゝ手をかけ
ます——

示ちやれうてゐまゆのあく
うそんおるまゝこひ病のこゝろ
ちんしてる手の杜を失ふ貫
斗ちやとある秋着ゝなくうつ
とも田のいゝて追悼の二句
悩んと春の郷をのゝへまし
いまをかゝ——をゝしの花ん

伊賀上野 泥梅也
未塵

国立国会図書館　タイトル『桃下華葉』　請求記号 863-175
ガラス使用

五七日

寂そうへ不珠美くそうへする百七日　　春葉

雫ぬまくちり敷の雪ぐれ　　雲人

朝拝除櫛の音ひよ水そめて　　一蜂

とく〳〵祢ハ去ぬ快のうみ空梨　　孚舟

ちうねの影ものやしし日のかすみ人　　桃夷

琴前一やりて船よてきく　　高砌

片うそてあらしなむ塚のまへ　　近江大津　駟道

百日のそうへや柳の生肉骨ら波　　白醉

ぬまそうへ帝釈うへよあ百　　播ケ二見　杉杢

とひはとうへそかうへの　　高砌　布舟

六七日

来て八又呼てまぬるやかりまん　　帰斎

杉原のうへ物業の風妨の業　　夏江

ちうみをむうへよ加うへの彩のふいて　　何有

ちうそう世業共業ふへし　　桃夷

国立国会図書館　タイトル『桃下華葉』　請求記号 863-175

ガラス使用

雪解ぬまの雨ちる日のあさ　方水

うぐひすもあるじめかほの巻　翁葉

捨ものとなりし小家の
いとゞところせきを
涼しさや地獄をかこむ友囲

ちゝこもり水ぞ一なの川　大和　南耕

涼風やゆかの人のうごかぬ　阿波徳島　素葉

雨てちかゝる多くの白菖や其あうち我の九品基　不樂

蓮の花こゝあら庵もよかれかし　五柳

こゝをよき涼しの月の船　南星

柳よの日ぐれてこの身涼し　近江走井　烏頂

桐なるや涙乃や赤ゐを西まて　陸奥笠島　南巍

七〳〵日

若竹も雫も幽にきこゆ　桃夭

国立国会図書館　タイトル『桃下華葉』　請求記号 863-175

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『桃下華葉』　請求記号 863-175

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『桃下華葉』　請求記号 863-175

ガラス使用

山の湧水一雲中の味ひす　美山
帆歌こゝもあす雪の川ゝも　江陵
雪と我かこゝの角力はめやし　湖滴
名を雪こゝるみちの霊　古硯
黛の屋つゝ嶽ちかこゝゝり　里水
いつもかたの文こゝつゝる　古泉
小雪ちる浅の朝の香ゆて　萬路
探をハすりみ御ゝるゝなの梅　亀畑
そゝゝし極帝のこれ践　市井

浪もなう新緑書の炭　古岩
若武者のたかゝめたる岩角や　仙梨
聲ゝゝゝ句詩を吟て　赤慶
世春なゝ一も名物の釋迦の巻　萬井
柳のうみ我作く彼岸　羅風

右於南関月影館興行

不二見人西邊の後千客百九十番

今や海ゝゝ社業帰巻　赤慶
枯てゝも柳のうへの新芽　萬井
大　羅風

国立国会図書館　タイトル『桃下華葉』　請求記号 863-175
ガラス使用

係そ小春そ秋ふ柳ふ　播蓬流

芦中や一柳のきり〳〵を　誠中嵩山　子元

月芝よ去てかくそ　イカ上野　指舟

と一春行脚の法のて　此笠の露を待ひ

一ものも一ものもいくそ　の実桜なるよ

一句をそこまおそ水そ　もいつひの花

ふとそこそちりそ

独な一くま杜そ又咲るり　三河之産也　笈舟

ちそふてそ春りぬみの日あ一非、　松尾

追善も風の便や一雑一九

うきも雪そまもふへあるも抹の水、　亀柳

ちそちふかくも雪の事や、　三橋　千喬

小祥忌

抱柳一すち水もめくみぬ　雲墨

そこもとの景のもとも去春の雲　丁江

おくの実の秋な実あるも寿のとき　詩航

てよそそ一すちさくも柳そな　杜人

国立国会図書館　タイトル『桃下華葉』　請求記号 863-175

ガラス使用

塚ときてとゝ——ハかなす——花の何て　阿波徳島　東何
先隣の日数も着よあり〳〵て、南甫
一ときハ鶯まねるうつの雪て、吟つ　呉雪
一声はとゝすの宮の——着よすと、明見魚　墨友
人ハいとゝ——まも着いぬるを、　桃友
沸め石の不二ときて春の雪、　井蛙
古もや孫よむ今の翁かな、岩服　南魚
着もやとゝひくまの咲つれ、　蘭秀
秀つゝ去年のゝ多白のを——柳、　一朝

一ときもとゝ柳のつゝみやひく年の詞、中島　豊歌
衣食のつゝあまゝハかねつゝもゝ春るゝ、　玉角
ゝつゝあまゝハかねつゝもゝ春るゝ、　三力
なゝ着やゝ時をとゝくゝす春まゝ今、福井　楠里
多向よて清水海るゝ柳丹、　百枝
着るの鶯やむりとゝまるゝ、宮岡　八朝房
ゝ鳥ハ梅ハ桃の借着ゝ、栃内　庄琴
春初よ去年のゝ多をゝひくゝ　イヨ　東歌

国立国会図書館　タイトル『桃下華葉』　請求記号 863-175
ガラス使用

行春や　もゝよ
さくら　富士
乙鳥の　声林
霞て　うぐひす
春ここち　ゆめ
とものこゑ　より
も　きゝぬ
　　を

歌仙　下田

廣名山

吉江　和切　魚守　江　切　有一

吉野のさくらの
碑　ありて
眺　ありて
眺望を　吟ずる
　　坂の
　　寄湾

桃雲

添碑　雪服
　　まで
　　て
　　て
　　て

すも通る霧の月おや玉津島　不二老師

いりえ潮の重き賛をもりもりまもる彩華を染めひ

りりてもてこ雪ての家珠ちもしらりやや

抜き駆ちりてていきて追福の転をものみる

歓こりあてこそ一　そそ苗秋植　柏後

懐ふつて一むくあをあをめて　喬洞

此ての法遠いか月のりりきて折り

弦集ちれてれちりれいまてもあって話

緑のそ一ぬ

附録

木のもうて山の寒さめ動きて　五彩堂

山霧は春までぬものて東事のて　清泊舎

やりりやへ人まのまるて三月葉　若蒲

へもかくいあてこ一　山りのいりもめそまは声　梅里

等よ入へをこ一よ法扱る　夏江

てこりちる等の年まの花あやめ　氷儿

国立国会図書館　タイトル『桃下華葉』　請求記号 863-175

ガラス使用

丁江　咲て新樹
都友　雲まてそそりつゝ林の
松菊　春のやりへを隔なよとするろ
瑞馬　昏乃川流をしてしめ日うを
桃源　春ものゝ香るのゝ
一鷺　うめうめよ今こゝにもゝの有
立寅　手折つゝ君さゝん
松羽　曲水や盃遠く小舟
馬尺　りまでや十日桜

きてこゝに
寒翁　窓ふ馬のつなくおと
つきよしの新さんふきちらくこの
あるじ

あるじ家の第室まて白牡丹　二道
日のうゝも眠しおやふぐんた　二蝶
笑まてくゝきおこ　二雲
ゆるる日まおのひきる牡丹　左蘭
秋くて眠まてそ後し着の衣乃
桜う香のやうて愛とそつめりて　霞堞

翌てこの日をもち…　古人　雨聴

こゝを為の主世の吟もち…　已祢福の年まつま

るうち来の長よもちれた…　ととてをけていつ

を深く望ありる春風も…　ます

や人とちりぬまでも…　ちこよ三枝五曽の

功もなくいろくな早…　まをおろ…

もち嘆もの省こて　雨柳

巣をまもる鳥は恥る…　外

いろちよ笑てもち…

伯父つ移よ雪をもち…　春の暮　女　其葉

や未期の雪ぬよ拾…

初もちるも二ち雪よ名ぬな　亀友

長男泉子をさきこて

逢さちよまもるもうしぬ風車　出真

泰まふあちる深めのちくち　志計

蝉のとぶやきめの翠のなて　鷺白

国立国会図書館　タイトル『桃下華葉』　請求記号 863-175

ガラス使用

雉子の聲つかひて遠ちこち　祖紅

略の雫つあとさめぬうちこと牛一のつく　巴風

鄙ぶあらうよせめて声　きくる　伊勢山田　玉羽

雪とくや筏よせます七里川　大和　古と春

炉塞てこもる人こと　摂津　景服　蓬春

白雲のすきまよこ松つよ蓮の花　芝村　牛父

第一う却の御　こワ　其い彩

押あつてゆくよ春待の女房達　琴浦　春人

嘘もまじて朝ふかくて春は風　河内　蓬宇

梅ゝ香すこ一あゝ松の風、　冰水

蕪の葉て影うつす古戸を、　花養

かきつばた人のあとよると春は鳥、　東六

月ゝ雫のさ一てゐ蛍ゐ事ゑ、　八十里

春は丁かてゐる声をなうらる　和泉堺　蜷笛

初花のまく粧かてよ草の蝶、　女　ちく

谷陰や一西日ゝ雫つうす菫　伊豫　元日坊

あちまちや桜ゝ夢日の影ゝ脇、　土居　五粒

国立国会図書館　タイトル『桃下華葉』　請求記号 863-175

ガラス使用

影向の石もまもりて松の老、　兒春
大日如来地をうしてあらはれ、　惟董
保元てきす峠下あやめ咲く頃　無崎　貫龍
大根のかうべもいつらおほろ月　伊賀　一青
乱なくてまもる旅寝　阿波　墨友
かつぐもの引くおもかげの春、　小朝庵
業の花風のまにまに小蝶舞、　東何
名所や湖水なす富士の影あく、　岩服　桃友
まのあたり小坂花、　蘭秀

十三

五月雨や名もあらはるる七奉書、　昌象
船遠見まもる身影枝もなし、　井蛙
一叶石松もあやなし志賀の山、　南魚
てふ我や向ふうこくるのうへ　長川流　一朝
いさよひの潮田こぐもなりをを　日向　以山
ほつしと着るあしや櫻の宿　近江　鳥頂
おもーろ鏡も曇れ峰　岐阜水　哥蝶
春のる花の華堂なれ　江戸　馬琴
ささなる学びくく日和うを、　完来

とし笑の枝もるる牛心

今朝そる秋のそら也あるて冴そのあら　京　更屑

一番うぐひすさそ山やしせそ声　小豆嶺　晋雅

うらのすまさ浦波うしろもの　尾張名古屋　士朗

うきそうて秋八月のそら　景山

夕魚の岩そ〳〵人のきそ　椹氏桑庫　桐梧

うつるそ秋そのまよよ岩の窟　龍窟　曙屋

おちの〳〵八蘂火のうへのゆるか　長崎　鼠風

不二庵終雪記　秀阿記

墨友解記　直刻

国立国会図書館　タイトル『桃下華葉』　請求記号 863-175

ガラス使用

14239

国立国会図書館　タイトル『桃下華葉』　請求記号 863-175

ガラス使用

863
175

国立国会図書館　タイトル『桃下華葉』　請求記号 863-175

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『桃下華葉』　請求記号 863-175

ガラス使用